

2010年10月29日

日本国際政治学会 2010年度研究大会部会4 地域からの帝国論—比較史と現在

グレートゲーム再考
—中央アジアにとっての帝国間競争の意味—

北海道大学スラブ研究センター

宇山 智彦

はじめに

19世紀から20世紀前半にかけての中央アジアとその周辺地域（アフガニスタン、チベット、モンゴル、カフカス、イランなど）をめぐる国際関係は、帝国間のグレートゲームとして描かれてきた。そして、ソ連崩壊後の中央アジアとカフカスをめぐる国際関係もまた、大国間の新しいグレートゲームと呼ばれている。しかし、近代のグレートゲームについては、イギリスとロシアのスパイ合戦や軍事行動を半ばジャーナリスティックに描いた本が多く¹、新しいグレートゲームについても、石油・ガスパイプライン建設や軍事基地の設置をめぐるロシア、米国、中国の対抗関係が時事評論的に論じられるばかりで、こうした帝国間・大国間の競争が中央アジアと周辺地域に何をもたらしてきたかを長期的な視野で論じた研究は少ない。

特に問題なのは、帝国間・大国間のゲームに関心が集中する結果、現地の諸政権・集団は将棋の駒のように扱われがちで、彼らによる帝国への協力ないし敵対行為がエピソード的に描かれることはあっても、その動機や背景が詳しく分析されることは少ないということである。しかし実際には現地諸勢力は決して受け身ではなく、それぞれの戦略を持って行動してきた。

幸い、帝国統治が始まった後の段階については、植民地のエリートや民衆と帝国権力の相互関係に焦点を当てた研究が近年盛んになっており、参考になる。イギリス帝国史においては、ロナルド・ロビンソンが1972年に、非ヨーロッパ地域のエリートの協力（または抵抗）のあり方こそがヨーロッパ帝国主義のメカニズムの中心であったとするコラボレーター論を提起して以来、帝国権力と植民地の人々がどのように互いを利用したかがさまざまな角度から検討されてきた²。ロシア帝国史でも、ソ連崩壊後に文書館史料を使って地

* 本報告は、新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第4班「帝国の崩壊・再編と世界システム」の研究成果の一部である。

¹ ピーター・ホップカーク（京谷公雄訳）『ザ・グレート・ゲーム：内陸アジアをめぐる英露のスパイ合戦』中央公論社、1992年；Karl E. Meyer and Shareen Blair Brysac, *Tournament of Shadows: The Great Game and the Race for Empire in Central Asia* (Washington, D.C.: Counterpoint, 1999) など。

² Ronald Robinson, "Non-European Foundations of European Imperialism: Sketch for a Theory of Collaboration," in Roger Owen and Bob Sutcliffe, eds., *Studies in the Theory of Imperialism*

方統治の細部を研究することが可能になり、同時にテュルク語・ペルシア語などの史料の分析が進むなかで、帝国権力と非ロシア人社会、特にムスリム社会との相互作用について多くの新しい知見がもたらされてきた³。ロシア領中央アジアと英領インドを比較したアレクサンダー・モリソンの仕事のように、帝国間の比較の試みも現れている⁴。

帝国の拡大や帝国間競争と現地諸勢力の関係については、「招かれた帝国」という概念を使って 18 世紀後半のカフカスの状況を論じた、ショーン・ポロックの研究がある⁵。ロシアが拡大に慎重な時期でも現地からの臣従申請や介入の要請によって引きずり込まれる場合や、逆にロシアが現地勢力に働きかけてそうした要請を出させる場合があったこと、ロシアはしばしば肝心な時に現地勢力を見捨てたことなど、示唆に富む指摘を多く含んでいる。ただ、主な関心はロシアの政策（特に、政策担当者の立場の多様性）にあり、現地側の事情をそれほど体系的に分析しているわけではない。

本報告では、こうした研究状況を踏まえながら一步進んで、帝国側よりも中央アジアとその周辺の現地勢力の側に視点を置き、諸帝国の拡大・統治や帝国間競争がこの地域にとって何を意味したかを考察したい。とはいえこれは筆者にとって新しいテーマであり、予備的な試論にとどまることをお断りしておく。この研究の難しさは、帝国側の史料に比べ現地人自身が書いた史料ははるかに少なく、しかも多くの言語にまたがるという点にある。筆者の能力では、一次史料で調べられる範囲はわずかであるが、二次文献や帝国側の史料を取り混ぜることで逆に、より大きな構図を描くよう努めたい。

主な対象とする時代は 19 世紀から 20 世紀初めだが、それ以前・以後の時期にも目を配り、なおかつ現在の国際関係を意識した議論を組み立てる。地域的にはロシア領と清朝（中

(London: Longman, 1972), pp. 117–142; Wm. Roger Louis, ed., *Imperialism: The Robinson and Gallagher Controversy* (New York: New Viewpoints, 1976).

³ 最も有名な研究成果はロバート・クルーズのものであり、日本では長縄宣博の研究がある。Robert D. Crews, *For Prophet and Tsar: Islam and Empire in Russia and Central Asia* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2006); 長縄宣博「帝政ロシアのムスリム社会と国家：ヴォルガ・ウラル地域 1905–1917」(東京大学大学院総合文化研究科博士論文、2007 年)。ただし、ムスリム宗務協議会や徴兵、ゼムストヴォといった制度を通じて国家と社会の緊密な関係が保たれていたヴォルガ・ウラルと、それらの制度がなかった中央アジアの違いには留意する必要がある。

⁴ A. S. Morrison, *Russian Rule in Samarkand 1868–1910: A Comparison with British India* (Oxford: Oxford University Press, 2008)。モリソンは最近帝国の拡大過程にも関心を向け、ロシアの中央アジア征服やイギリスのアフガン戦争において現地の人々の情報や労働力がどう使われたか（あるいは軽視されたか）について、精力的に論文を書いている（未刊）。

⁵ Sean Pollock, “Empire by Invitation? Russian Empire-Building in the Caucasus in the Reign of Catherine II” (PhD diss., Harvard University, 2006)。ポロックは明記していないが、「招かれた帝国」という概念は、第二次世界大戦後の米国の役割を論じたゲイル・ルンデスタッドの論文から借りたものと思われる。Geir Lundestad, “Empire by Invitation? The United States and Western Europe, 1945–1952,” *Journal of Peace Research* 23, no. 3 (1986), pp. 263–277。もっとも、ルンデスタッドが、米国の影響力拡大が西欧など世界各地で要請・歓迎されたことをやや一方的に述べるのに対し、ポロックはカフカスの人々がロシアに協力するだけでなく、抵抗したり他の帝国とコンタクトをとったりする場合も視野に入れ、よりバランスのとれた見方をしている。

国領の中央アジアを中心とし(ただし筆者の専門の関係上、ロシア領の方が詳しくなる)、隣接する内陸アジア・南アジア地域にも必要に応じて言及する。通常、グレートゲームはイギリスとロシアの競争として描かれ、中国は帝国主義による侵略の対象という位置づけだが、本報告では、清朝・中国も帝国間競争の主体の一つとする。これは、ロシアのカザフ草原進出と清朝の東トルキスタン進出が共にモンゴル系遊牧国家ジュンガルの興亡と関係し、19世紀後半にはロシアも清朝も中央アジアでの直接統治体制の確立に取り組むなど、ロシアと清朝の中央アジア政策には同時性があるからである。そしてまた、今日深刻な民族問題であり続けている新疆・チベット問題の淵源も、清朝・中国とロシア、イギリス、日本という諸帝国間の関係を抜きにしては理解できないからである。

1. ロシア・清朝の中央アジア進出における現地諸勢力の役割

ポロックの「招かれた帝国」という考え方は、中央アジアにもかなりの程度当てはまる。ロシアの中央アジア進出の端緒となったのは、カザフ草原の主に西部を支配していたアブルハイル・ハンが1730年にロシア皇帝への臣従を申請し、翌年認められたという事件である。当時カザフ人はジュンガルと戦っており、1717年以降何度もロシアに同盟関係ないし保護を求めていたが、ロシアは消極的だった。これは、ロシアにとってジュンガルは清朝との関係で重要なカードになり得たためだと思われる。しかし、清朝と戦っていたジュンガルは、1722年末の康熙帝崩御に伴う清朝軍の一時撤退で余裕ができてカザフ人に猛攻撃をかけ、カザフ人の逃走で他の中央アジア各地も荒廃し、ロシア領のバシキール人・カルムイク人やコサックとカザフ人の衝突も頻発するようになる。するとロシアも国境地域と対中央アジア交易の安定化のため、カザフ人を臣従させることに積極的になった。アブルハイル・ハンはこの臣従を、ジュンガルやバシキールなどとの関係の安定化に役立てたのはもちろん、カザフ・ハン国の中での中央集権化や、ヒヴァなど隣接地域への影響力拡大に利用した。しかしロシアとの関係を有利な同盟としてとらえたアブルハイルの意図はやがて裏目に出て、1740年代以降、ロシアはカザフを実質的に従属させるべく手を打っていくことになる⁶。

ジュンガルはやがて清朝に滅ぼされるが、これにはジュンガルの内紛が関係していた。1745年に強力な君主ガルダンツェリンが亡くなると、後継争いで一族の間に殺し合いが起き、王族の一人アムルサナーが他の人々と対抗するために清朝に助けを求め、彼を先頭に立てた清軍が1755年にジュンガルを簡単に攻略したのである。間もなくアムルサナーは清朝の処遇に不満を抱き、ジュンガルを含む全オイラトの盟主を名乗って独立を図ったが、以前からジュンガルの完全征服を決意していた清朝はこれを認めず、彼はシベリアに逃れ

⁶ Irina Erofeeva, *Khan Abulkhair: polkovodets, pravitel' i politik* (Almaty: Sanat, 1999).

て病死する⁷。

ジュンガルの本拠地は現在の新疆北部の遊牧民地域であったが、その支配下にあった南部の定住地域（タリム盆地）も、自動的に清朝の征服対象となった。ジュンガル征服後、清朝はカシュガル・ホージャ家の二大勢力のうち白山党を使ってタリム盆地を掌握しようとし、白山党も清朝を利用して黒山党を攻撃したが、白山党の指導者ホージャ・ジャハーンらはやがて清朝に叛いたため、清軍は1758～59年にタリム盆地に侵攻し占領した。この地域はオアシスごとの分裂傾向が著しく、ホージャ・ジャハーンに対抗して清朝に協力する有力者も多かったという。なお、タリム盆地東部のハミヤトウルファンは、ジュンガルとの対抗のため、既に1720年代までに清朝に帰順していた⁸。

19世紀のロシアによる中央アジア征服も、現地諸勢力間の対立と複雑に絡み合いながら進んだ。セミレチエ（現在のカザフスタン南東部とクルグズスタン [キルギス] 北部）のカザフ人、クルグズ人は、コーカンド・ハン国の圧政から逃れるため次々とロシアに臣従した⁹（ただし、コーカンド・ハン国に協力したクルグズ人やカザフ人も決して少なくはなかった）。1864年にロシアがコーカンド・ハン国領に本格的に侵攻する際にも、コーカンドの知事の横暴に反発したカザフ人が、ロシアにタシケント方面への進軍を働きかけたことを、コーカンド史料は記している¹⁰。実際のタシケント占領（1865年）にあたっては、ロシア軍を率いたチェルニャエフ将軍が親ロシア派の市民の協力を予期したのに反し、ブハラ・アミール国の救援を期待する市民のかなり強い抵抗に遭ったが、それでもコーカンド支配下の混乱の終結と交易の復興を願うタシケント商人の動きは、ある程度ロシア軍を助けた¹¹。ブハラ軍は、タシケントを救うためにロシアと戦うよりも、混乱に乗じてフジャンドをコーカンド・ハン国から奪うことを選んだ。

興味深いのは、一度はロシアに抵抗した者やその一族であっても、別の地域でのロシアの戦いや政治工作に貢献し、取り立てられる者が少なくなかったことである。1837～47年にカザフの大反乱を率いたケネサル・カスモフの子アフメト・ケニサリンは、父の死後コーカンド・ハン国の軍人になっていたが、61年にロシア臣民となり、ロシアの対コーカンド戦を大いに助けた¹²。1860年代末に、ブハラ・アミールがロシアと和平を結んでいた

⁷ 宮脇淳子『最後の遊牧帝国：ジュンガル部の興亡』講談社選書メチエ、1995年、226–229頁。

⁸ 佐口透『18–19世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館、1963年、45–66頁。

⁹ *Kazakhsko-russkie otnosheniia v XVIII–XIX vekakh (1771–1867 gody): sbornik dokumentov i materialov* (Alma-Ata: Nauka KazSSR, 1964); *Khrestomatiia po istorii Kyrgyzstana*, 2nd ed. (Bishkek: Raritet Info, 2004).

¹⁰ T. K. Beisembiev, “*Ta’rikh-i Shakhrukhi*” *kak istoricheskii istochnik* (Alma-Ata: Nauka KazSSR, 1987), pp. 126–127.

¹¹ M. A. Terent'ev, *Istoriia zavoevaniia Srednei Azii*, vol. 1 (St. Petersburg: Tipo-litografiia V. V. Komarova, 1906), pp. 306–321; Edward Allworth, ed., *Central Asia: 120 Years of Russian Rule* (Durham: Duke University Press, 1989), p. 19.

¹² TsGA RUz (Tsentral'nyi gosudarstvennyi arkhiv Respubliki Uzbekistan), f. 1, op. 2, d. 56.

にもかかわらずロシアへの抵抗を続けたシャフリサブズのベク、ジュラベクとババベクも、その後コーカンド・ハン国での反乱鎮圧などでロシアに積極的に協力した¹³。1880～81年にロシア軍に対する激的な抵抗（ギョクデペの戦い）を率いたトルクメン人の一人、マフトゥム・クリ・ハンは、間もなくロシアに忠誠を誓い、メルヴの同族にロシア臣籍取得を説得した¹⁴。これらの人々にはいずれも、ロシア軍の佐官の地位が与えられた。グレートゲームの同時代的な参加者・観察者であったジョージ・カーゾン（のちのインド総督）は、ロシアは現地民の扱いがうまく中央アジアでは人気があるとし、特にイギリスと比べての特徴として、かつての敵を厚遇し利用する点を挙げている¹⁵。

これらの事例にはある程度共通するパターンがある。しばしば現地勢力間の対立、つまり目の前の敵を倒すために強大な国と手を結ぼうという動きが、帝国の進出を招く（帝国の側は最初から進出に積極的であった場合も、当初は消極的であった場合もある）。短期的には現地勢力が帝国を利用し振り回すことも多いが、やがて事態は彼らの意図を超え、長期的な従属につながっていく。帝国の利益と、現地勢力間の対抗関係や個人の利益が重なってさらなる征服活動が続く場合もある。

2. 中央アジア諸勢力は帝国間の対抗関係をどう利用しようとしたか

前の節では、一つの帝国と中央アジア諸勢力との関係を見たが、この節では、複数の帝国がある地域に関与していた場合に、現地の政治指導者がどのような態度をとったかを検討する。

諸帝国との関係で最も派手な動きをしたのは、東トルキスタンのヤークーブ・ベグ政権である。同政権は、この地域がムスリム反乱により清朝と断絶した状況を利用して1865年に侵入したコーカンド軍人、ヤークーブ・ベグが建てたものである。イギリスは東トルキスタンに親英政権を樹立させたいという希望を持ち、ヤークーブ・ベグ政権もイギリスによるロシア牽制と英領インドでの武器調達に関心を持ったため、両者の間に外交関係が開かれた。もっともイギリスはその後、東トルキスタンの地政学的・商業的重要性が期待したほど高くないと感じ、関心を減退させたといわれる。ヤークーブ・ベグ政権はまた、オスマン帝国を宗主国として中央アジア・ムスリムの間での権威を高め、同帝国からの武器援助と軍事顧問団を受け入れた。他方、同政権とロシアの関係は、ロシアが清朝から得ていた通商上の権利が宙に浮いたことや、同政権の北方拡大を防ぐためロシアがイリを占

¹³ Valerii Germanov, "Politika formirovaniia v Turkestanskom krae loial'noi Rossii natsional'noi elity," in *Rossiiia-Uzbekistan: istoriia i sovremennost'*, vol. 4 [Zhurnal *EvroAziia*, no. 7] (Moscow: Istoricheskii fakul'tet MGU, 2008), pp. 85–89.

¹⁴ TsGA RUz, f. 1, op. 2, d. 1215, l. 1–2ob.; M. N. Tikhomirov, *Prisoedinenie Merva k Rossii* (Moscow: Izd-vo vostochnoi literatury, 1960).

¹⁵ George N. Curzon, *Russia in Central Asia in 1889 and the Anglo-Russian Question* (London: Longmans, 1889), pp. 388–391.

領し、コーカンド・ハン国を通じての介入も模索したことから緊張していた。それでもヤークーブ・ベグ政権はロシアと通商協定を結ぶことで独立政権としての認知を事実上勝ち取り、微妙な関係を保った。しかしいずれの帝国も東トルキスタンに対する正確な認識や明確な戦略を欠いており、1877年の清朝による再征服を防ぐことはできなかった¹⁶。

次に、ロシアと英領インドの狭間で中小の勢力が分立していた、カシミールからパミールにかけての山岳地域の状況を見よう。ジャンム・カシミールのマハラジャ、グラブ・シンは、もともとパンジャブのシク王国の下でジャンムを支配していたが、第一次シク戦争(1845～46年)でイギリスに内通し、カシミールの支配権と藩王の地位をイギリスから得た人物である。そのような経緯にもかかわらず、彼はイギリスの影響を抑えるためコーカンド・ハン国との接近を図った。その子ランビール・シンは、中央アジアを征服したばかりのロシアとの友好関係樹立を模索し、1870年にはロシアのインド侵攻を期待してトルキスタン総督府に使節を送りさえしたという。ロシアはカシミールとの通商に興味を示したが、イギリスを刺激しないよう、政治的な働きかけには応えなかった。それでもロシアがカシミールとの間接的な接触を図ったことはイギリスの警戒心を高め、イギリスのカシミール支配を強化させる結果となった¹⁷。

カシミールから見て北方にあるフンザは、カシミールと時に対立し時に協調する関係にあったが、1880年代には、カシミールとの対立と、カシミールを通じて影響力を拡大しようとするイギリスへの警戒を強めていた。そこへ1888年に地理学探検のためにやって来たのが、ロシア軍の大尉プロニスラフ・グロムチェフスキー(ポーランド人)である。これは、グレートゲームの「スパイ合戦」物語でロシアの野望を示すエピソードとして好んで取り上げられるものだが、実際には彼はロシア政府からフンザについて特に指令を受けていたわけではないようだ。にもかかわらず、フンザの君主サフダル・アリーは彼をロシアの使節として盛大に迎え、ロシアへの臣従を申し出た。グロムチェフスキーは、自分には権限がないのでカシュガルのロシア領事と相談するように言い、サフダル・アリーは実際にカシュガルとタシケント(トルキスタン総督府)に向けて使節を送ったが、カシュガルの領事は使節がタシケントに行くことを許さず、ロシア政府もサフダル・アリーの書簡に返事をしなかった。結果的に、グロムチェフスキーの訪問はロシア進出の可能性に対するイギリスの警戒を強め、フンザ征服を早めることになった¹⁸。

パミール(現在のタジキスタン東部)は、ロシアとイギリスの領土・勢力圏の境界画定

¹⁶ Hodong Kim, *Holy War in China: The Muslim Rebellion and State in Chinese Central Asia, 1864–1877* (Stanford, CA: Stanford University Press, 2004), pp. 138–158.

¹⁷ K. Warikoo, *Central Asia and Kashmir: A Study in the Context of Anglo-Russian Rivalry* (New Delhi: Gian Publishing House, 1989), pp. 13–45.

¹⁸ B. L. Grombchevskii, *Nashi interesy na Pamire* (Novyi Margelan, 1891) <<http://militera.lib.ru/research/grombchevsky/01.html>>; N. L. Luzhetskaia, *Ocherki istorii Vostochnogo Gindukusha vo vtoroi polovine XIX v.* (Moscow: Nauka, 1986), pp. 57–58.

における焦点となった場所だが、現地の内紛やアフガニスタン、ブハラとの関係が、しばしば英露の意図しない状況をもたらした。たとえば英露は 1873 年に、アフガニスタンの北部国境をパンジ川とすることで合意していたが、アフガニスタンは同じ年、パンジ川の両岸にまたがるシュグナンから税を取り立て始め、1883 年には軍も置いた。この進軍は、シュグナンを中心に広い影響力を持っていたイスマーイール派宗教指導者サイイド・ファッルーフ・シャーらが、シュグナンの君主ユースフ・アリー・ハーンを退位させるためにアフガニスタンに要請したためであった。ロシアはイギリスを通じてアフガニスタンにパンジ川右岸からの撤退を求めたものの、アフガニスタンは応じず、英露はこの状態をしばらく放置した。そのうちにサイイド・ファッルーフ・シャーらシュグナンの人々自身がアフガン軍の駐留長期化に苦しんで反乱を繰り返し、ロシアに臣従を申請したので、ロシアはシュグナンに軍を送った。英露は 1895 年にパミールでのアフガン国境を最終画定させたが、ロシアは保護国であるブハラ・アミール国にパンジ川左岸の領土を放棄させる代わりに、シュグナンとルシヤンのパンジ川右岸地域をブハラに与えた。しかしシュグナンとルシヤンの人々はこれを不満とし、1905 年に事実上のロシアへの併合を実現させた¹⁹。

パミール東部の人口稀薄なクルグズ人地域は周辺諸国からの介入に対しより脆弱であり、シュグナンとは対照的に、主体的な行動をとることが難しかった。1860 年代にこの地域はコーカンド・ハン国の支配下で一定の安定を享受していたが、その後ヤークーブ・ベグ政権、清朝、アフガニスタンの相次ぐ侵攻を受け、その度に荒廃した。最終的には 1895 年の英露協定に基づきロシアの支配を抵抗なく受け入れた²⁰。

以上のように、ある帝国・大国との関係で独立を脅かされた政権は、しばしば帝国間の対立を利用して別の帝国と手を結んだり、バランスを取ろうとしたりした。これに対する帝国の反応は時に恣意的であり、時に他の帝国との関係に配慮して慎重であった。清朝領の各地に介入したイギリスやロシアが、結局は清朝の宗主権ないし主権を認めたように、諸帝国は国際関係を大国間の秩序として維持することに利益を見出したのである。それでも帝国の意志が常に貫徹したわけではなく、ヤークーブ・ベグ政権への対応のように諸帝国の戦略があいまいな場合や、シュグナンの例のように小地域の人々の実力と決意で事態を変えられる場合もあった。

3. ムスリムは異教徒の帝国による支配をどう正当化したか

¹⁹ A. V. Postnikov, *Skhvatka na "Kryshe Mira": politiki, razvedchiki i geografyy v bor'be za Pamir v XIX veke* (Moscow: Pamiatniki istoricheskoi mysli, 2001), pp. 183–188; *Istoriia Gorno-Badakhshanskoi avtonomnoi oblasti*, vol. 1 (Dushanbe: Paivand, 2005), pp. 332–340, 351–371.

²⁰ B. L. Tageev, "Pamirskie kirgizy," *Niva*, no. 38 (1897) <<http://zerrspiegel.orientphil.uni-halle.de/t1056.html>>; *Istoriia Gorno-Badakhshanskoi*, vol. 1, pp. 348–350.

中央アジアで多数を占めるムスリムにとって、オスマン帝国を除く諸帝国は異教徒の国であった。それらの国と接触が外交関係にとどまっていた間は、その正当性が宗教的に説明・議論されることはほとんどなかったように見える。しかし帝国による支配が始まると、それがイスラーム的観点から見て受け入れ可能なものなのか、しばしば議論になった。イスラームでは、世界はイスラーム法が適用されるダール・アル・イスラーム（イスラームの家）と、イスラーム世界と対立するダール・アル・ハルブ（戦争の家）に分けられ、ダール・アル・ハルブに組み込まれたムスリムは、聖戦に立ち上がるか、ダール・アル・イスラームに移住することになっているが、何をもってイスラーム法が適用される地域と見なすかは、大いに議論の余地があるのである。

ロシア領中央アジアでは、征服当初から、たとえ異教徒であっても公正な支配者はムスリムの暴君に勝るとして、ロシアの支配を正当化するムスリムが少なくなかった。ロシアがイスラーム法の適用範囲や判事の選び方を変えながらもイスラーム法廷を維持し、なおかつ末端の行政を現地民の郷長・村長に任せるシステムを確立すると、そのことをもってイスラーム法の適用とみなし、ロシア領中央アジアをダール・アル・イスラームと呼ぶ論理も、イスラーム知識人の間に共有された。他方では異教徒の支配と判事・行政官の腐敗を批判し、1898年にアンディジャン蜂起を起こした者たちもいたが、イスラーム知識人たちは、蜂起は無謀でムスリムの死者を出すだけだとして批判した²¹。

インドでは、イギリス人によって改変・編纂されたイスラーム法（Anglo-Mohammedan law）がムスリム統治に適用されていたが、この地はダール・アル・ハルブになったとして聖戦や移住を唱えるムスリムも一部に存在していた。1870年前後に、英領インドがダール・アル・イスラームなのかダール・アル・ハルブなのかをめぐって改めて論争が起きた。この時多くのイスラーム知識人は明確な答えを避けながら、イギリス人はムスリムを保護する公正な支配者だから、反乱を起こす理由はないと論じた²²。その背景には、多くの犠牲者を出した1857年のインド大反乱（ヒンドゥーもムスリムも参加）への反省があったかもしれない。

東トルキスタンでは、度重なる反乱の際に聖戦が呼号された。他方で、清朝が明確なイスラーム政策を持たなかったがゆえに、イスラーム法廷は大きな変化なく機能し続けたため、東トルキスタンをダール・アル・イスラームと呼びうる根拠はあったが、実際にそのような議論がなされたことを示す史料は見つかっていない。しかし濱田正美によれば、清朝皇帝の公正さと正義を認め、「塩の義務」というテュルク系諸族の伝統的観念（支配者が下の者に塩とパンを与える代わりに、下の者は支配者に忠誠を尽くすべきだという考え）

²¹ 小松久男「聖戦から自治構想へ：ダール・アル・イスラームとしてのロシア領トルキスタン」『西南アジア研究』69号、2008年、60-78頁。

²² P. Hardy, *The Muslims of British India* (Cambridge: Cambridge University Press, 1972), pp. 107-115.

を使って清朝への従属を正当化する見方や、異教徒がムスリムを支配することも神の摂理だとする観念が存在していた²³。

このように、論理は異なりながらも、公正であれば異教徒の支配も許容する態度は、ロシア領・清朝領の中央アジアと英領インドに共通して見られた。これは、公正や正義がイスラームにおいて重要な観念であることとも関係しているが、基本的には、さまざまな外来政権の支配を経験してきたこれらの地域の人々の現実主義として解釈できよう。

4. 帝国支配と近代化・文化運動の関係

以上のように、中央アジアとその周辺地域の人々が諸帝国に対して取った態度は多様であるものの、その時の状況に応じて帝国との関係の結び方を柔軟に変え、帝国支配に対しても協力と抵抗の両方の態度をとり得たという点で、地域的にさほど大きな差異はなかったと言ってよい。しかし今日状況から見れば、旧ロシア・ソ連領中央アジアは国によって貧困や独裁などの問題はありながらも独立を果たし、旧英領インドも印パ対立を抱えながら独立国としての道を既に長く歩んでいるのに対し、中国領東トルキスタンは、チベットと並んで中国への抵抗をしばしば示しながら独立を果たせずにいるから、どの帝国に組み込まれたかによって人々の運命は大きく分かれたのである。このような違いが生まれた理由は、本部会の岡本報告が扱っている「主権」概念の問題を含め、帝国・大国側の政策によるところが大きい。ここでは、被支配者側の帝国・大国への視線・態度に、近代化の必要性に伴ってある時期から分岐が生じたことに注目したい。

前節ではロシア領中央アジアのイスラーム知識人がこの地をダール・アル・イスラームと見ていたことに触れたが、実はこれは定住民地域の話であり、ロシアがイスラーム法の適用対象から除外した遊牧民地域の事情はより微妙であった。カザフの著名な詩人アバイ（1845～1904）は、自分たちはダール・アル・ハルブに住んでいるのだとはっきり書いている。しかし彼はこれを、ロシア支配を覆すべきだという趣旨で書いたのではない。逆に、ロシア人は富も芸術も科学も持っているから、カザフ人もロシア語とロシア式の教育を学んで、心と目を開くべきだと述べている²⁴。宗教問題と土地問題で不満を持ちつつも、自分たちの文化水準と権利の向上のために、ロシア語を習得しロシアを通じてヨーロッパの

²³ 濱田正美「『塩の義務』と『聖戦』との間で」『東洋史研究』52巻2号、1993年、122-148頁。濱田がこの議論の主な根拠としているのは、ムッラー・ムーサーが1903年に完成させた史書『ターリーヒ・アムニーヤ（安寧史）』であるが、新免康は同じ史料を使いながら、ムーサーが清朝皇帝を陛下とは呼ばず、ヤークーブ・ベグのみを陛下と呼んだこと、ヤークーブ・ベグ政権崩壊と清朝の再征服について「高貴なイスラームの光輝をこの暗黒の雲が曇らせた」と述べていることを指摘する（新免康「『辺境』の民と中国：東トルキスタンから考える」溝口雄三ほか編『アジアから考える3 周縁からの歴史』東京大学出版会、1994年、117-119頁）。清朝支配を神意として認めながらも完全に肯定できないムーサーの複雑な感情が窺える。

²⁴ Abay, “Jiirma besinshı söz,” in his *Shigharmalarining ekı tomdıq toliq jinaghi*, vol. 2 (Almaty: Jazushi, 1995), p. 176.

学問・技術を学ぶ必要があるという考えは、多くのカザフ知識人が共有していた。そして、ロシア人やタタール人などの政治運動と連携しながら自治運動に取り組んだ²⁵。定住地域でも、知識人たちはロシアがもたらした文化環境に適応しロシア語を学びながら、イスラーム改革運動と自治運動を展開した²⁶。1991年の中央アジア諸国独立は直接には、連邦制をとっていたソ連の崩壊によるものだが、帝政期・ソ連期を通じて、中央アジアの人々がロシア・ソ連の状況に適応しながら行政能力を身につけ民族文化を確立させたことは、比較的スムーズな独立の前提となった。

英領インドでもイギリスから文化を吸収する動きが見られ、イギリスが英語教育の拡大に慎重な時期にさえ、インド人が先回りして英語学習に取り組んだ。そしてロシアと違いイギリスには民主主義が確立していただけに、インド人エリートは民主主義を基準としてイギリスの統治政策を批判し、権利拡大を要求する戦略を身につけた。そして高等文官への登用とイギリス議会での議席獲得を熱心に求め、地方議会にも積極的に進出していった。これらは、粘り強い独立運動と並んで、独立後のスムーズな脱植民地化を可能にした。

これに対し、東トルキスタンの状況は大きく違っていた。1880年代以降、清朝はこの地域のムスリムを対象に中国語教育を行ったが、あまり浸透しなかった。20世紀になると文化運動・改革運動が盛んになるが、その手本は中国内地ではなく、タタール人などのロシア・ムスリムとオスマン帝国であった。中国は政治的に従属する相手ではあっても、文化を学ぶ相手にはならなかったのである。これらの運動は、1930年代の独立運動にもつながっていく²⁷。他方で、清末以降に日本とヨーロッパの帝国主義による領土簒奪への危機感を高めた中国は主権へのこだわりを強め、東トルキスタンを絶対に手放すまいとの姿勢を固める。ロシア領のように帝国内のさまざまな民族の運動と連携することも、イギリス領のように本国の民主主義に学ぶこともできない東トルキスタンのムスリムは、独立の準備につながるような政治経験を積みにくい。こうして、帝国・大国支配にかなり適応していたインドやロシア・ソ連領中央アジアは独立し、中国支配への違和感が強い東トルキスタンは独立できないという皮肉な状態が続いているのである。

おわりに

一般に、大国が大国でありうるのは、他の大国とどのような競争・共存関係を築き、小国・小地域をどう味方につけたり従属させたりするかという、他との関係性があってこそ

²⁵ 宇山智彦「20世紀初頭におけるカザフ知識人の世界観：M. ドゥラトフ『めざめよ、カザフ！』を中心に」『スラヴ研究』44号、1997年、1-36頁。

²⁶ Adeb Khalid, *The Politics of Muslim Cultural Reform: Jadidism in Central Asia* (Berkeley: University of California Press, 1998).

²⁷ 大石真一郎「ウイグル人の近代：ジャディード運動の高揚と挫折」『アジア遊学』1号、1999年、24-39頁。

のことである。本報告が取り上げた事例は多様だが、帝国の拡大や帝国間競争において、小国・小地域の勢力が時に主体的で重要な役割を果たしたこと、ただし彼らの自立的な動きが長期的には帝国への従属につながったり、帝国が彼らを放置したりすることも少なかつたこと、帝国が公正と安定をもたらす限り多くの人々は帝国支配に順応しようとしたが、近代化と自立を目的とする文化・政治運動が展開される時期になると、帝国が文化的・政治的な手本や活動機会を提供できるか否かによって、人々の帝国への態度に分岐が生じたことが確認できた。

これらの点のうち、小国が短期的には大国をふりまわすほどの重要な役割を演じながら、長期的な利益は得にくいという問題は、現在の国際関係を見るうえでも有用な着眼点になりうる。2008年のグルジア・南オセチア問題をめぐる国際的な緊張は、単純に米ロによって仕組まれたのではなく、グルジアと南オセチアの側が米ロを引き込んだ面が大きい²⁸。しかしオバマ政権の成立で米ロ関係が「リセット」されるとこの問題もほとんど忘れられ、南オセチアは脆弱な独立を手にし、グルジアは彼らが主張するところの領土が欠けたまま、膠着状態にある。また、クルグズスタンのバキエフ政権は米軍基地を撤退させるか否かで米ロを振り回し、両方から援助を引き出したが、恨みを持ったロシアによるネガティブ・キャンペーンと国内の政権基盤弱体化とが重なり、群衆の圧力で2010年に政権が崩壊する。

しかし、小国の権利が簡単に蹂躪され、大国の領土さえ蚕食される可能性があった20世紀前半までの時代と違い、今日の国際関係が主権国家体制であることの意味はやはり大きい。冷戦期には米ソの属国への介入は多かったが、冷戦終了後は、介入の口実を見つけるのはますます困難になっている。いくら米国やロシアの気に入らない政権があっても、独立を奪うことはできないし、政権打倒も、その国の国民自身が行動を起こさない限り実現は難しい（米国のアフガニスタンとイラクへの介入は例外的だが、介入してもその後の処理に苦しむことになる）。他方で国家主権と内政不干渉の原則があるがゆえに、東トルキスタンやチベットの独立問題のように、帝国主義時代に未解決に終わった問題の解決の見通しも立たないのである。

²⁸ 宇山智彦「グルジア紛争後の中央ユーラシアとロシア：小国のパーゲニング・パワーが作る国際秩序」『現代思想』2009年3月号、206-217頁。